

△書評形式による毛沢東像の分析▽

日本人が捉えた毛沢東像

—己の夢を文革に托した人々のその後—

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学助教授)

夢想家たちの「転向」

文化大革命が『林彪異変』という衝撃的な結末をもって終熄し、他方では「革命外交」から「国家外交」への転換が遮二無二すすめられている今日の中国の大きな、そして実際的な変化をまえにして、わが国の中国研究者ないしは中国問題の評論家のあいだには、一種微妙な「転向」が進みはじめている。

かつて、あれほど威丈高に文化大革命の世界的意義を説いてやまなかった論壇の寵児

たちは、いまや問題を回避してほとんど黙しただけであり、未完の中国革命の最高の到達点だとして文化大革命におのれの革命の夢とロマンを託し、その革命的意義を知ったかぶりに説いてまわった、急進主義者たちは、文革のことなどもう忘れてしまったかのようである。そうしたなかで、日中国交がまさに体制側のペースで進められたことは、これらの夢想家たちのいらだちを倍加したであろうし、同時に降って湧いたような中国ブームへの反撥と相俟って、その微妙な「転向」が更に

促進されたようにも思われる。竹内好氏らの雑誌『中国』の停刊も、その象徴的なあらわれであろうが、この場合には例によって、その停刊が大きな身ぶりや意味づけられ、とかく中国にたいする△姿勢▽を問題にすることの好きな、わが国ジャーナリズムの一角をにぎわしたようである。だが、私の眼からすれば、なぜ停刊がもっと静かにもっと素直におこなわれないものかと思う。あのように高踏的に停刊の言を弄すること自体が、やはり一種の居直りなのではなからうか。これまでのような分析の枠組ないしは発想では、もはや今日の中国の権力的実態はほとんどつかみ得ないのだ、という問題の本質にたいして、なぜ、もっと謙虚になれないのかといいたくもなるし、「誤りをおかしたら、改めることが必要で、改めるのは、はやければはいほどよく、徹底的であればあるほどよい(毛沢東)」という『毛主席語録』の一節を引用してみたくもなる。

竹内好氏らの今回のような旋回に對比して、かつて、『矛盾論・実践論』の「翻訳論争」では、竹内好氏から激しくのしられさえしたことのある竹内実氏は、最近、きわめて旺盛な著作活動を展開しており、ここ一年ほどのうちにも数冊にのぼる氏の著書が刊行されている。そのように精力的に問題におつかっている竹内実氏が「△毛沢東と中国共産党△」を同一物として、表裏一体のものとして考えてきた「通説」に抗して、毛沢東と中国共産党との関係を、「対立する関係」として前提し、「率いられるものの集団」としての中国共産党と「君臨する存在」としての毛沢東という構造のなかで党と指導者の諸関係を説明しようとした野心的な試みが、この『毛沢東と中国共産党』である。

斬新さが取柄の仮説

しかも著者は、右のような仮説を、たんに中国共産党史を再検討し、再構成するための方法的前提とするとどめず、この構造こそ「中国文明における官僚制の永遠のパターンである」とさえ語っている。すなわち著者

は「序——ひとつの仮説」において、右のような問題を大胆に提起したのち、その「むすび」においては、「△毛沢東と中国共産党△」の△関係△は結局のところ、△率いる者△対△率いられる者の集団△としての△関係△であって、後者は中国文明の永遠の型としての△官僚制△の末端に、現時点において位置する、というのが本書の端的な要約となろう」と述べているのである。

この「序」と「むすび」は、いかにも著者らしい鋭い問題提起であり、きわめてアトラクティブな見方であるが、本書のなかの本論部分を読みすすめてゆくと、内容的には、中国共産党の成立から文化大革命を経過した今日の時点にいたる中国革命史の独自の再構成ではあっても、著者の右の問題提起が本論の部分では十分に生かされていない、問題提起の部分だけがきりはなされているように思われるのは、問題提起が鋭いだけに残念でならない。

しかも、気がついてみると、きわめてユニークに思われた著者の仮説が、次第に通俗的な常識論でしかないようにも思われてくるの

はなぜであろうか。もちろん、個々の点では斬新な解釈や緻密な分析があり、いかにも著者らしいのであるが、本書はその「序」と「むすび」のみを中心にしたエッセイであるべきではなかったかとも思われさえするのである。

このように本書のモチーフと叙述の内容とが一体化し得ていない原因の一端は、中国共産党史にかんする最近の国際的な科学的研究の成果が十分に反映され、吸収されないまま、ソ連科学アカデミーの『コミンテルンと東方』や張国燾の回想録に著者が「新しい発見」を見出しすぎているからでもあろうし、一九四三年五月以前の中国共産党を必ずしも十分な理由づけなしにコミンテルン官僚期としながら（一—ページ以下）、他方では、それ以前から中国共産党はコミンテルンにたいして「完全に独立して、……自己の政治方針、政策および行動を決定できた」（一一—五ページ）とするような矛盾があったりするからでもあろう。

また、Ⅲの「中国の党として」では、遵義会議から七全大会、七全大会から八全大会前後と叙述の飛躍が大きく、ムラがあったりす

ることも気がかりである。「国際共産主義運動の総路線についての提案」は、「毛沢東が杭州で陳伯達とともに作成したものである」というような指摘が論証なしに、しばしば出てくることへの抵抗もあろう。これらの点を含めて、本書では著者の問題提起が必ずしも成功しているように思われず、あえて率直な感想を記すなら、竹内氏としては、失敗作であったように思われる。最近の氏の著作には「」のみならずや／＼や……がきわめて煩雑に頻出し、それは文学者としての表現上の特権なのかもしれないが、同時に、氏の最近の資料選択にはいささか執拗なまでの趣味が出すぎてはいしないだろうか。あの「正統的」な『中国年鑑』の文芸欄を、以前しんぼう強く愛読した経験のある私としては、香港、台湾、ソ連と最近の氏の自由闊達な資料選択にあらためて隔世の感を深くする。

毛沢東像をリアルに描写

これにたいして徳田教之氏の『毛沢東主義の形成』は、小著ながら、一九三五・四五年という延安時期の中国共産党における毛沢東

のリーダーシップの形成過程とその歴史的位

置を追跡したものと成功しており、とくに、毛沢東のカリスマ化への上昇過程が中国共産党内の路線闘争をめぐる権力の実態のなかで浮き彫りされている点で、きわめて興味深い著作である。

本書は、著者がカリフォルニア大学（パークレイ）現代中国研究所に留学し、そこで国際的な中国共産党史研究の成果を目撃しつつまとめたものであり、大学用の講義テキストとして限定出版されたものであるが、政治社会学の方法論に立脚した中央党史として、またわが国の中共党史研究における空白部分を埋める成果として本書を位置づけることができよう。著者の力点は、中国共産党の組織とイデオロギーにたいする毛沢東の「凝集力」の実態を毛沢東のリーダーシップの進化の過程に照して分析しながら、七全大会（一九四五年）において完成した毛沢東の党にたいする支配の原型を抉出することにある。そしてそのような権威の頂点において予見されるカリスマ的指導者の不安と弱さが「毛沢東中心話」の形成をもたらしたとして、毛沢東中心史

観ともいえる党史の改訂にまでつながっていた諸状況についても語っている。本書がユニークであるのは、右のような毛沢東主義の形成過程が、たんなる党史としてではなく、毛沢東主義の成長過程における政治的・組織的ダイナミックスとしてとらえられている点にあるといえよう。こうして、「毛沢東のカリスマへの道が開けたのは、状況から生まれる客観的圧力によるとともに、毛沢東自身の意志の産物でもある」として問題がとらえられ、延安整風が中国共産党にとって、倫理・道徳主義的な「思想革命」であつた以上に、「中国共産党の毛沢東化へ向う毛沢東自身による慎重に計画された『大突進』であつた」ことが解明されている。もとより

著者は、その中国研究の出発点において、中国革命への心情的共感などからはそもそも「解放」されていただけに、たとえば毛沢東の延安時期における哲学学習への志向についても「最高指導者としての毛が、かれのその後の革命の戦略術論の根底になつてゐる弁証法的思考を、ここで十分におこつておこつた」という指導のための実践的必要性があつた」か

らだというようにみなしている。

このように著者は、あえてそこまで意地悪い見方をしなくても、と思えるような見解をしばしば表示しているが、このようなドライな対象化が毛沢東像のリアルな描写にかえって役立っているのである。本書には、第一章「分析の枠組」で示されている方法論についてのいささか仰々しい教示もあるが、このような自意識については著者がひそかにいまま少し禁欲的であつたら、本書はもっとよかつたと思う。

毛沢東信仰の戯画があるだけ

最後に、梅本克己・遠坂良一氏の『対談 毛沢東思想と現代の課題』は、水戸で発行されている月刊『東風』誌上に連載された哲学者・梅本克己氏と『東風』主宰者で明らかに反日共・親毛沢東の遠坂良一氏との対談である。かねて『現代思想入門』（三一新書）等で、中国革命への共感の原点をきわめてラディカルに提示し、それゆえに「毛沢東思想」絶対化への懐疑を鋭く示された梅本氏が、今日の時点で中国をどう考えているかという点

から、さぞかし本書は興味深いものと期待された。

だが、梅本氏は、「あなたは、もともと毛沢東と共鳴することのできる何かをもっているようだ。(笑) それにしては、毛沢東の『発見』がおそすぎた。(笑)」という遠坂の発言にたいし、「遠坂さんは、ほくを、遠坂さんのような毛沢東主義者に仕立てあげようと願望し、その願望に心酔しておられるようだけでも、(笑) 目下のほくの実態は、それほど信頼に足る毛沢東主義者ではない」と答えてはいるものの、以前の氏の立場と比較したとき、毛沢東への傾斜がもはや無限定的に著しくなっていて、そこに批判の視点はほとんど消失してしまっている。「文化大革命は根深く残存する資本主義復活の道を掘りおとし、それを根だやしにするために遂行された不断革命の一環である」というような、すでに定型化されたオプティミスティックな評価についてはともかく、文化大革命は、自身の「書齋の批判に反省をうながした」と語られているように、批判から同調への梅本氏の大きな旋回を本書は見せつけている。

アツというまに!! アツとくつつく アロンアルファ®

東亜合成化学

東京都中央区八重洲5-3-1 電話 (274) 0171

瞬間接着剤

季刊 現代中国

発売中

春期第5号

B5変型
3000円

内容紹介

中国の政治・経済・文化の実態と動き
をあますところなく追求し、公正中立
の立場で報らせるユニークな季刊雑誌

国聞報と鄭永昌領事Ⅱ中下正治 「中間地帯論」外交の
復活Ⅱ岡部遺味 超大国批判と中間地帯論Ⅱ小林多加士
ソ連社会に投影した中ソ対立Ⅱ木村明正 中国工業技術
の特色(対談) これからの日中関係(座談会) ほか

経済往来社

もとより、このような立場におちいってしまつた以上、今日の中国の内政・外交の変化に耐え得るようなリアルな認識力はそこになく、きわめて主観的な戯画のみがあるように思う。第一、「人間革命」とか「人民大衆」という言葉がしばしば出てくるが、その場合の人間とか大衆とかは中国の人間であり、中国の大衆であることはけつしてなく、氏自身の見果てぬ夢を「主体的」に対象化した観念的な人間であり、大衆でしかないように思う。

先『毛沢東と中国共産党』のなかで竹内実氏は、毛沢東の「文芸講話」について、「その命題が形成される過程が結合した側面に
おいては、価値をもっている。感動的できえある。たとえば、毛沢東が自己の思想の変化についてのべた部分などがそれである。しかし、これが「教養」として使われると、その使われる局面においては、「官僚制度」の組成部分である。そして社会主義体制のもとで、文芸が官僚制度の枠外に出ることは、まだ制度的に実現したことがないのである」と述べていた。こうした疑いなどはいささかもたずに、『毛沢東の『文芸講話』、こんど読みなおしてみても、ほんとうに感心しました」と語り、「林彪異変」についても、『朝日新聞』が伝えた『繼承志談』を読んで、「これで事の

真相もはっきりしたといっているんじゃないでしょうか」と語る程度の遠坂氏の中国認識・毛沢東信仰にたいし、梅本氏は、ほとんど最後までひきづられっぱなしなのである。その意味で本書は、梅本氏の痛々しくも無残な思想的掃着点を知るためには大いに役立つであらう。

竹内実著『毛沢東と中国共産党』(中公新書・二〇〇円)

徳田教之著『毛沢東主義の形成(一九三五—一九四五)』(慶応通信・六五〇円)

梅本克己・遠坂良一『対談 毛沢東思想と現代の課題』(三一書房・八〇〇円)